

情報教育支援

岡田 直之¹

大学の情報系センターをにおける時代の変遷は激しい。大きな総合大学では、いくつかの関連組織が統合されて「情報基盤センター」へ移行するなどの動きが見られる。本学においても情報科学センターが設立後14年を迎え、そのような議論のなされてよい時期に来ている。否、遅すぎるといって指摘も一部に受けている。どのような方向を目指せば良いのか。

本学は、工業系の単科大学である。少し情報の歴史を振り返ると、1971年に全国的にも初期段階、九州地区では最初に情報工学科が工学部に設置された。1974年には全国で3番目となる情報処理教育センターが設置され、工学部の全学生を対象に一般情報処理教育の支援体制が取られた。1986年には全国で初めての情報工学部が設置され、それを受けて1987年には情報処理教育センターと情報処理施設が発展的に改組し、情報科学センターが設置された。従来 of 工学部学生に加え、知能情報工学科、電子情報工学科、制御システム工学科、機械システム工学科、ならびに生物化学システム工学科の学生を対象に情報処理の専門基礎教育の支援体制が整った。これを立上げ、整備し、円滑な運営を維持するのがこの十年であったと言える。

それでは、これを発展させるにはどのようなことを考えればよいのか。学内においては図書館等関連する情報・メディア組織との連携、学外においてはSINET、SCSなど各種ネットワークとの協調、また地域社会においては種々のセミナー、講習会のサービス、等なさねばならぬ課題がいくつもある。加えて今年からは生命体工学研究科の大学院生も加わった。多様な学内外の要請、持てる資源、そして未来社会を考えると、どこに軸足を置き、なにを特徴として発展させればよいのか。

工業系単科大学という事情は、総合大学に比べ、学生教育の範囲が工学系に絞り込まれている特徴がある。また、情報が生まれ育った計算機工学は、まさに工学の一部門である。そのため情報処理に関し工学部や生命体工学研究科の一般教育、また情報工学部の専門教育、とかなり情報処理の専門に踏み込んだ教育ができるし、特に情報工学部はそれが使命でもある。本センターでは、まだメインフレームが大勢であった1992年、他に先駆けて

● ワークステーション (WS)

¹情報工学部知能情報工学科, okada@pluto.ai.kyutech.ac.jp

- X 端末 (1 台の WS で 10 台の X 端末を制御)
- UNIX(SunOS)

からなる大規模分散処理環境を整え、情報教育支援を行った。その後この分散処理環境は全国的に採用されている。また本センターが作成したテキスト「X ウィンドウによる UNIX 入門 (朝倉書店 1993 年)」とその改訂版² は全国で 3 万部を超すベストセラーとなった。そして此の度リプレースした

- 高性能な NFS サーバ (ディスクレス端末の起動用と利用者ファイル)
- 高速回線 (ギガビットネットワーク)
- ディスクレス端末 (MiNT-PC400)
- LINUX(TurboLinux)

による分散処理環境は、再び大学や企業等から注目を浴びている。従来の路線を踏まえて将来像を考えると、たとえどのような形態に移行するにせよ、専門性の高い高度な「情報教育支援」(必ずしも処理を含まないものを含む)こそを軸足としかつ最大の特長とすべき、と確信する。

各大学が輝ける個性を持って前進する時代が到来している。今までの路線に誇りを持ち、これを基礎において新しい時代の情報教育支援、さらには情報系センターを模索したい。

²ワークステーションでの暮らし方 (朝倉書店 1997 年)、インターネット時代のフリー UNIX 入門 (朝倉書店 2001 年)